

無理してでも一緒に出掛ける、心のバリアをはずすことを心がけて。

お話：武知 由佳子 医師

いきいきクリニック 院長

取材・レポート：『めづるくらし』研究会 編集部

車イスで海外旅行と聞くとハードルが高くて、ムリ！ムリ！と思われる方も多いかもしれませんが、そんなことはありません。

母（武知明子さん）が膝を痛めて車イスになってから数年たちますが、私が休暇をとれる夏休みや年末年始を利用して海外に出かけています。

ユニバーサル企画など、旅行会社のパックに参加する方法もありますが、私たちは徹底的に下調べして、個人で計画を立てます。下調べをするのは母の役目。私は毎日仕事に追われていますから、母にドーンと研究資料を渡して、その土地の歴史まで調べてもらっています。

母も私も出かけるのが大好き、未知のことに挑戦するのが大好き。海外でもあくまで、公共交通機関を使って移動します。

旅行はいつも家族同様のスタッフと3人一組で行くのですが、私は母の車イスを押し、スタッフが大きなトランクを二つ持って。一つには3人分の衣類などを詰め、もう一つは母が買うお土産用にするんです（笑）。

母は旅先でもすごく頼りになる存在です。チケットやお金や大切なものは『ママ、お願い！』と預かってもらいます。私がハイウェイを運転するときには助手席にいて、しっかりナビ係もしてくれます。

それでも、母は旅行から戻ってくると「迷惑かけたから、これで最後にしましょう。」なんて言います。でも、私たちは『ママ、また行こうよ！行こうよ！』って、スタッフも母との旅を楽しみにしてくれます。

私は卒業旅行に父と一緒にハンガリーに行きま

したが、母はその頃はネコの世話もあって実家の佐久で留守番でした。医者になってからも父とはよく旅行しましたよ。父との最後の旅行は、父が脳溢血で倒れて両足にマヒが残り、歩くのは非常に困難な状況にあった時でした。

ちょうど神戸で「呼吸器学会」があつて、それに便乗して行こうということに。父の郷里は兵庫県ですから、親戚にも会わせられるし、と母の強い希望でした。母も膝が痛い状態でしたから、車イス2台で行きました。あれが今までで一番大変な旅行でしたが、母は大満足でした。無理してでも行つて、本当によかったと思っています。

かつて勤務していた病院で「迷惑をかけたくないから。何も希望しない。」と患者さんがテレビのチャンネルを変えることにすら遠慮しているのを知り驚いたことがあります。

その時、病气、障害、高齢……、どんな状況にあつても、心にバリアをはらないで、自分のしたいことを自由に選び、希望してほしいと思いました。

車イスの旅行にも心のバリアフリーが必要ですね。



『いきいきクリニック』のスタッフの皆さん。一緒に旅をしてくれるナースの方々は「人のためになる」ことに労をいいます。「母を楽しませるためなら」とありがたいことです。



ベネチアでは空港から市街地行きの海上バスに乗る時「渡し板が細くて車イスの車輛がはみ出しヒヤッしました。」市内を走る海上バス（パボレット）はバリアフリー。電車で移動したフィレンツェのヴェッキオ橋にて。

武知 由佳子：いきいきクリニック・院長

内科・呼吸器科、医師。2007年、開院。障がい・病気があっても、住み慣れた家・地域で暮らし続けたい、その思いを尊重した医療看護を提供。からだのケアだけでなく、たましい、こころのケアも含めた全人的ケアを行っている。また、残されるご家族の心のサポートのお手伝いも。訪問リハビリテーションに力を入れ、特に呼吸ケアスペシャリスト、緩和ケアスペシャリストによる訪問診療、訪問看護を行っている。

▼いきいきクリニック

〒212-0016 神奈川県川崎市幸区南幸町2-34-2
TEL: 044-522-5556 FAX: 044-522-2232

E-mail: ikiiki.clinic@gmail.com

HP: <http://ikiiki.missionjapan.org/main1.html>



訪問診療中の由美子先生を大歓迎する患者さん宅のネコたち。



堀口 順一郎：イラストレーター

庭園から日本家屋まで幅広い建築表現を有し、ユーキャンなど、多くのグラフィック・マップの製作を手掛ける。また『太平記』（学習研究社）などの歴史物や人物像から、釣り本の解説イラストなどと多岐にわたって活躍。